

第1回 NITS 大賞（平成 29 年度）エントリーシート

鳴門教育大学教職大学院 松井 直人（大学院生）

A-12

【活動名】 不登校生徒支援の在り方

解決すべき課題： どのような問題を解決しましたか？

私は鳴門教育大学教職大学院に在学しており、2年次を迎え、学校課題FWとしてX県にあるA中学校において実践研究をおこなっている。実践研究を開始するにあたり、A中学校の教職員と生徒を対象に教育相談に焦点を絞ったアンケートを実施した。その結果、ほとんどの生徒が学習や学校生活、人間関係において何らかの不安や悩みを抱えていることが分かった。このように内面に何らかの課題を抱えながらも、多くの生徒は、自分なりに心身のバランスを保ちながら学校生活を送っている。しかし一方で、何らかの要因によって不安や悩みが大きくなって、心身のバランスを崩してしまう生徒や、過度な葛藤状態に陥る生徒が存在する。それらが不登校や非行といった形で表面化している場合もある。このような不安定な状態や表面化した諸問題に対する支援の充実を課題ととらえ、実践研究に取り組んでいる。

目的や背景： 解決すべき課題の背景や、活動の目的をおしえてください

中学生期における生徒は、心身ともに子どもから大人へと変わっていく第二発育急進期、第二次性徴期を迎え、自己の急激な変化の中で不安や危機に直面することがある。また、生徒間・対教師・家族との人間関係、進路選択などの問題にも直面し、心身共に揺さぶられる可能性が大きい時期であるともいえる。このような思春期・青年期特有の不安定な状態が、不登校や非行などの生徒指導上の問題に関係している。

これらの課題の解決の道筋は、当該生徒が何らかの気づきを得て問題を乗り越えていく（個人が変わる）側面と、学校や家庭における当該生徒を取り巻く困難な状況が改善される（環境を変える）側面の両面から検討する必要がある。

したがって、本実践研究においては、本人の内面の変化を見守り支援する個人へのかかわりと、家庭や関係機関と連携しながら環境の調整を図る環境へのかかわりの両者を大切に教育相談の在り方を検討していく。さらに、単に問題の解消を図るだけでなく、生徒一人一人が直面した自身の課題と向き合い、自らに与えられた状況を受け止めて、前に進んでいくことを目指し、そのために教師はどのような支援ができるのかを考察していく。

活動内容： 何をしましたか？

「研修修了者成果活用実践部門」については、研修のどのような内容を活用して課題解決につなげたかがわかるように記載して下さい。実践研究の大きな柱として、「教育相談室からの発信」「不登校生徒支援」「教職員の意見交換・情報共有の充実」の3つを据えた。「教育相談室からの発信」では、教育相談だよりの発行や、教職員が自身の中学時代の苦悩や葛藤を全校生徒に語る企画の運営、個別の相談対応等を通して、予防・開発的なかかわりを続けている。「教職員の意見交換の充実」では、生徒をチームとして援助していくために、ケース会議の実施や校内ネットワーク上に生徒の変化を書き込み閲覧できる掲示板の作成等、意見交換の時間と場と手段を充実させている。「不登校生徒支援」では、支援の中心となる学級担任と協力し、計画的な家庭訪問や登校時の別室支援、個別の生徒記録等をおこない、心身の安定を目指し、かかわりを展開している。3つの柱の中でも「不登校生徒支援」においては、不登校生徒に直接的にかかわること自体が困難なケースや、直接かかわって様々な手立てを続けながらも大きな変化がみられない状況が続いた事例もあった。このように支援が停滞する中で、焦りや苛立ちを感じることも多くあった。そのような中で、不登校生徒支援の在り方を見直し、新たな知識を獲得したいという思いから教育相談指導者養成研修に参加させていただいた。本研修において、実践に繋がるような多くの理論と知識を得ることができた。中でも2つの事柄が9月以降の不登校支援において大きな変化を生んだ。1つは研修中にいただいた「不登校支援の主体となるのは学校（教師）である。」という言葉である。家庭と連絡を密にして支援のタイミングをはかることや、外部機関と連携して支援の輪を広げていくことも大切であるが、学校として教師として生徒のために何ができるかを考え実行し続けることの重要性を教えられた。もう1つはインシデントプロセスによるケーススタディーの手法とエコマップの作成である。ケーススタディーの手法では決めつけによる重要な情報の見落としについて痛感させられた。全ての情報に支援のヒントが隠されているのである。エコマップの作成は現状を明確に整理・分析することの重要性に気づかされた。これらの学びをもとに、不登校支援において学校や教師が主体になることの重要性を支援の中心となる学級担任と確認し合い、支援の活性化をはかっている。また、家庭訪問や電話連絡、登校時のかかわりで得られた情報を互いに質問し合い、エコマップや生徒記録に細かく追記していき、支援の在り方を検討するようにした。

活動の成果： それによって、どんな成果が得られましたか？

4～7月期における不登校生徒支援では、支援が停滞し、焦りや苛立ちの連続から支援のあきらめにつながるような感情に支配されつつあったが、2学期がスタートされる9月には、学級担任との協働関係も形が定まり、学校や教師が主体となりかかわり続けることの重要性を再確認し合うことができた。これによって生徒の小さな変化に喜びを感じ、それらを共有し、さらなる支援に繋げていく支援のエネルギーを得ることができた。また、不登校生徒やその保護者とのかかわりで得られた情報をエコマップにおとし、さらに細かな生徒記録をとることによって、これまでよりもさらにきめ細やかな支援が可能になった。

その結果、昼からの別室登校だった生徒が次第に朝から教室に入ることができるようになったり、家庭訪問をしても顔を見ることができなかった生徒と顔を見て話すことができるようになってきたりという変化が生まれ、彼らの表情にも明るさや落ち着きを感じられるようになってきている。一方で、外部機関との連携の必要性を感じるケースもある。今後外部機関と連携する場合にも、エコマップと生徒記録は情報を共有するための大きな手段になると感じている。

アピールポイント（アイデア）： もっとも、がんばったことを、注目したことをアピールしてください。

支援の中心となる学級担任に「不登校支援の主体となるのは学校（教師）である。」という言葉が最も大きかったと感じている。かかわっても変化のない現状に焦り苛立ち、支援をあきらめてしまいそうになる状況から、「教師が教師としてできることはまだまだある。」「先生は一人ではない。」「信じてかかわり続けることにこそ大きな意味がある。」というメッセージを送り、支援のエネルギーを供給することができたからである。教師が生徒の可能性を信じ、自身の支援の意味を信じ、かかわりの中で生まれる関係性が何らかの展開につながることを信じてこそ、生徒の変容・成長が実現するのではないだろうか。